

岩田系図諸本の比較分析 (二)

根ヶ山 泰 史

第一章 岩田系図の諸本 (前号からのつづき)

【史料三 武州丹党岩田系図 (丹党岩田丹治比姓系図・小浜本)】 (9)

〔外題題意〕  
「武州丹黨／岩田系圖」 (10)

丹黨 家紋丸中丹一文字

岩田 丹治比姓 系圖

本國武藏国秩父郡白鳥郷岩田邑、岩田ハ村名而、在於武藏国秩父郡、士人説、一大石』在田逸、号岩田邑、以岩田為号者、十八代』丹治政廣始領其所、在屋敷跡、』吉例年每三元日、以一羹・二麩饗應之、自祖』至今用此例也、』丹黨氏神丹生大明神社、在於岩田村、每年』九月十九日為祭礼、同邑野上村勸請丹生』社、毎月朔日祭祀之、惣丹黨之在邑必齊』祭丹生村也云、

○宣化天皇

第二十九代、又檜隈高日王子

又武小廣國推立尊

諱武小国押盾、繼繼體天皇第二子也、母曰目子媛、是尾張連草香女、雄略帝十二年』戊申生、安閑帝二年乙卯十二月即位、二』年春正月遷都干大和国高市郡檜隈』廬入野、夏五月詔曰、食者天下之本也、黄金』萬貫不可療飢、白玉千箱何能救冷、収藏』穀稼蓄積儲糧遙設凶年厚饗良客』修造官家那津之口、四年

春二月甲午崩』時、年七十三、葬于大和国桃花鳥坂上陵、

上殖葉皇子

亦名椀子、是丹比公・偉那公凡二姓之先也、母』橘仲皇后、

十市王

多治比古王

亦名多治比彦武王、』河内国丹南郡丹治比村若松天神、延喜』式所載丹治比神社是也、每年六月二十五日・』十一月二十五日修祭事、則丹治比古王之灵社』也、今稱菅神、非也、

島真人

左大臣、正二位

天武帝十一年、筑紫大宰丹比真人嶋等貢』大鐘、同十二年貢三足雀、持統帝三年、以』直廣壹授、直廣貳丹比島増封一百戸、同』四年正月己卯、公卿百寮拜朝如元日會儀、』島真人與布勢御主人朝臣、奏賀騰極、』同年七月、正廣三右大臣、同五年、増封三百戸、』通前五百戸、文武帝四年正月癸亥、有詔』賜靈壽杖及

興儻、同年八月、左大臣、大寶元』年三月甲午、正二位大納言、同年七月壬辰、薨、』詔、遣右少辯從五位下波多朝臣廣足、』治部少輔從五位下大宅朝臣、金弓等監護』喪事、又遣三品刑部親王、正二位石上朝臣麻呂、』就策、吊賻之、正五位下路真人、右人爲公卿』之誅、從七位下下毛野朝臣石代、爲百官之誅、大』臣者、宣化天皇玄孫多治比王之子也、和銅五』年九月己巳、詔曰、故左大臣正二位多治比真人島』之妻家原音那、贈右大臣從二位大伴宿禰、御』行之妻紀朝臣音那並以夫存之日、相勸爲』國之道、夫亡之後、固守同墳之意、朕思、彼貞』節感歎之深、宜此二人各賜邑五十戶、其家』原音那加賜連姓、

池守 大納言、從二位、大宰帥

持統帝七年、直廣肆、和銅元年三月、民』部卿、同年九月戊子、爲造平城宮司』長官、同六年四月乙卯正四位下始從四位上、』同七年正月、從三位、靈龜元年五月壬寅、』太宰帥、養老元年二月辛巳、賜大宰』帥池守、綾一十四、絹二十四、緇三十四、綿三百屯、布一百端、褒善政也、同二年乙巳、』中納言、同五年正月壬子、大納言、神龜元』年二月甲午、益封五十戶、同二年十一月、賜』靈壽杖并繩綿、同四年正月庚子、從二位、』同年十一月辛亥、引百官史生已上、拜皇』太子於大政大臣第、天平元年二月、就長』屋王宅、窮問其罪、同二年九月己未、薨、左』大臣島第一子也、縣守 中納言、正二位、征夷將軍宣命之始也、慶雲二年十二月癸酉、從六位下、和銅三年』四月壬午、從五以上、靈龜二年正月癸巳、從四』位下、同年五月壬寅、爲造宮卿、同年七

月』癸亥、爲遣唐押使、養老元年三月己酉、』賜節刀、同二年十月、太宰府言遣唐使』縣守來歸、十二月壬申、縣守等自唐国』至甲戌進節刀、同三年正月辛卯、天皇』御大極殿受朝與從四位上藤原朝臣武』智磨二人贊引皇太子也、同月壬寅、正四』位下、同年七月庚子、管相模・上野三國、于時』武藏国主也、同四年九月戊寅、爲持節征夷』將軍、同五年正月壬子、正四位上、同年四月乙』酉、爲鎮狄將軍、同六年六月辛丑、中務卿、天』平元年三月甲午、從三位、同三年八月丁亥、』兵部卿、同年十一月丁卯、山陽道鎮撫使、同』四年正月甲子、中納言、同年七月丁亥、山陰』道鎮撫使、同六年正月己卯、正三位、同七年』二月癸丑、赴於兵部曹、問新羅入朝之』旨、』同年十一月乙丑、舍人親王薨、天皇遣縣守就』第宣詔贈大政大臣、同閏十一月壬寅、天皇臨』朝、召諸国朝集使等、縣守宣勅、同九』年六月丙寅、薨、島之第二子也、

水守 宮内卿 從四位下

大寶二年十一月丙子、賜封一十戶、于時從』五位下、同三年七月甲午、尾張守、同四年五月』乙巳、河内守、和銅元年三月、近江守、同二年、』從四位下始正五位下、同年九月、美濃守、同三』年四月癸卯、右京大夫、同四年庚寅、宮内卿、』水守卒、嶋之第三子也、

廣足 中納言 正四位上

養老元年八月甲戌、赴於美濃州、造行宮、』神龜三年正月庚子、正五位下始從五位下、同年』九月壬寅、造頓宮司、天平五年、上總守、同十』八年四月、刑部卿、同十九年正月丙申、從四位』上、同年二月、兵部卿、同二十年二月己未、正四』位下、同廿一年七月、正四位上中納言、天平勝寶』二年正月乙巳、從三位、同六年七月癸丑、造山司、』

同年十一月甲申、藥師寺僧行信與八幡神宮』主神大神多摩等同意厭  
魅下所司推勘』罪合遠流、廣足就藥師寺宣詔、同八年五月』丙辰、  
造山司、天平寶字元年八月庚辰、勅廣』足年深將耄力弱就列不教諸  
姪悉為賊』從如此之人、何居宰輔宣辭中納言、以散位歸』弟焉、同  
四年正月癸未、薨、廣足者平城朝時』歷仕内外、至中納言、勝寶九  
年坐子姪黨逆而』免職歸第、以散位終焉、島之第四子也、

廣成

式部卿 皇太子傳、中納言、從三位

和銅元年正月、從五位下、始從六位上、同年三月』丙午、下野  
守、同五年、從五位上、同七年十一月庚』戌、副將軍、養老元  
年正月、正五位下、同三年七』月庚子、管能登・越中・越後三  
國、于時越前國』主也、同四年正月甲子、正五位上、神龜元年  
二』月壬子、從四位下、天平三年、從四位上、同四年七』月丁  
亥、遣唐使、同五年三月戊午、拜朝、閏三』月癸巳、辭見授節  
刀、同年四月己亥、遣唐四』船自難波進發、同六年十一月丁丑、  
入唐大使』廣成來著多禰島、同年三月、正四位上、同九』年八  
月庚申、參議、同年九月己亥、中納言、』同十年正月、兼式部  
卿、同年八月乙亥、武』藏守、同十一年四月戊辰、薨、嶋之第  
五子也、

濱成

武藏守 正五位下

寶龜九年十二月己丑、判官、天應元年八月』丁丑、從五位下、  
同年十二月丁未、造山司、延曆』元年閏正月甲子、左京亮、同  
年八月乙亥、少輔、』同三年十二月己巳、從五位上、同四年八  
月丙子、』右中辯、同六年二月庚辰、常陸介、同七年三』月己

己、征東副使、同九年三月丙午、陸奥按察』使兼守、同十年七  
月壬申、征夷副使、

貞成

從五位上 木工頭

天長九年四月廿五日、改多治比、為丹治、

峯成

左京大夫 從四位上

永成

從四位下 因幡守

永成六世孫幹成大判官從四位上 武藏介、其子宗直私市』大夫、從五位下相

模介・武藏守、其子孫代々』稱私市大夫、住武藏州私市邑、

所謂私之黨、』河原・私市・熊谷・瀬山・瓶尻・春原等祖也、

貞峯

左中辯

貞峯者、右京人也、入學有才藻奉試及弟、補』文章生、天長十  
年、兵部少丞、承和元年、轉』大丞、承和五年、從五位下、除  
播磨介、同十四年、』民部少輔、嘉祥三年、遷為駿河守、為政  
清』厚吏民稱之、齊衡三年、大學頭、天安元年、』遷刑部少輔、  
同二年、民部少輔、數月拜右』少辯、同年八月、文德帝崩故、  
為裝束司、』同年十月八日、迎伊勢齊內親王、十一月七』日、  
從五位上、貞觀五年二月十六日、右中辯、同』日大監物、同八  
年二月廿一日、賜姓多治真人、』先是、貞峯等上表曰、因土命  
氏百王之彞』規分姓成親千古之茂典姓幸其本何記皇』流氏失其  
初誰知、天應私檢吉野宮御宇、宣』化天皇皇子加美惠波皇子生  
十市王、十市』王生多治比古王、此王生產之夕、忽多治比之』

花飛浮湯沐釜、以斯冥感、名多治比古王、』成長後、固執謙退  
 奏請求姓、因賜多治比』之公便、以名為姓存其舊意、淨御原  
 天皇』十三年、氏は時多治比古男左大臣正二位』志摩公賜姓真  
 人、志摩真人是貞峯高祖』父也、天平十六年、遣唐使正三位中  
 納言兼皇』太子傳式部卿、多治比真人廣成入唐之日、』改作丹  
 墀、復命之後、猶用舊姓傳來百年』無心變改、天長九年四月廿  
 五日、木工頭從五位』上、多治比真人貞成等奏請、改多治比三  
 字、』為丹墀兩字、當于斯時、貞峯等身非氏』長、不預私議心  
 懷不穩無駁論之夫物貴不』失真理、則言因實、豈偏賞入唐之新  
 文訛所』生之舊字乎、加之、竊案文辭倩思義理丹』墀真人是涉  
 忌諱伏願以古多治字換今』丹墀姓緣煩文請省比字、雖除一字稱  
 謂』不變、然則、存先祖之感生貽孫謀於不朽』不勝懇欸之至、  
 拜表以聞詔許之云、同年、』正五位下、同十年正月七日、從四  
 位下、同月十六日、』遷為伊勢守、不之任、同十二年七月九日、  
 獻蓮』一莖二花、同十六年十一月九日、卒、壽七十六歲、

武信

陽成帝元慶元年、下向武藏国、依之、後裔繁』榮於加治郷・秩  
 父郡・加美郷（那力）・一井』之地、

峯信

桑名丹二（マヤ）大夫

峯時

丹貫主』異云、峯明 始住關東、産武州、

「峯房

武藏守

武経

大夫 丹貫主

始住武州秩父、

武時

丹貫主

武峯

四郎冠者  
二大夫

經房

丹三冠者

中村・竹淵・塩屋・古郡・大河原・黒谷・岡田・下中村・小鹿』  
 野・坂田・大窪・栗毛・横脛・横瀬・彌郡・本田以上十六』氏之祖、

長房

薄次郎

薄・織原二苗字祖、

基房

秩父黒丹五、異曰、勅使河原黒丹五郎

勅旨河原・堀口・南荒居・青木・由良・新里・安保・滝瀬・』長濱・  
 榛澤・小寫・志水・加治・高麗十四苗字祖、

俊貞

加治三郎 左衛門尉

基氏

桐原孫三 左衛門尉

基兼

判乃三郎

行房

白鳥七郎

白鳥・岩田・藤矢淵・野上・罪山・井戸・山田・葉栗八苗字祖、

基政

七丹二郎

政房 小八郎	政茂 小七郎	廣房 又五郎	廣時 小五郎	廣員 六郎	廣家 七郎	政家 白鳥四郎 岩田五郎	政信 岩田二郎』号藤矢淵、	政經 野上三郎	東鑑曰、建長二年、於京都以課役出材木者、称』岩田三郎、	政成 山田八郎	政廣 山田七郎	政光 山田六郎	國時 黒谷五 異曰、則政	富士野夜討時、為曾我時宗蒙疵云、	東鑑第廿五日、承久三年六月十四日、於宇治川上首』一討捕 <small>政廣一、鎌倉勢</small> 、是在金持兵衛之日記、此時鎌勢』中蒙疵之中、岩田八郎云者、愚按、山田八郎歟、與岩田七郎・同岩田二郎、又得首二、是皆載金持兵衛之日記、
-----------	-----------	-----------	-----------	----------	----------	--------------------	------------------	------------	-----------------------------	------------	------------	------------	-----------------	------------------	--

忠重 太郎、帶刀先生	實員 太郎二郎 式部少輔	女 藤田 <small>前名』(マ)</small> 長門守小野宗員妻 藤田系圖曰、岩田左衛門實利一女、藤田野太郎宗員』聚之、宗員後改長門守、岩田實利入道以一跡授』宗員後、宗員聞有入道之實子、以岩田之地授之、』是永享比、岩田太郎二郎改式部少輔丹治比實員、	實長 岩田將監太郎 左衛門尉 異曰、實利、雜髮、 勝定院義持將軍之時、鎌倉足利左馬頭持氏之時、』在應永二十 <small>(足利)</small> 四丁酉年上杉氏憲入道禪秀乱ノ日記、 實春 將監二郎』号西安保、	基廣 右近將監	實成 青木二郎	長廣 彦五郎	成房 十郎	長房 九郎	行時 六郎	忠國 小五郎
---------------	-----------------	---	--	------------	------------	-----------	----------	----------	----------	-----------

良堂 参内之僧、』和尚

忠幸 太郎

母者西上野國後閑左京大夫家久女、

義幸 三郎 對馬守

母同、

義幸 對馬守 從六位下

母者上州後閑領主後閑左京大夫源家久女也、』對馬守、戒名臨

田淨室居士并其妻香室貞蓮大姉、右』夫婦位牌在岩田村臨濟宗妙心寺派

道光寺・瑞光寺(岩)真言宗新義・滿』光寺其外在岩田領所々之寺、

義真 後閑孫太郎

幸重 岩田孫二郎

女 人見越前守安利妻

女 本田筑前守貞信妻

女 諏訪部三河守光長妻

房幸 岩田三郎六郎

房幸 三郎六郎 伊勢守

實者對馬守義幸末子、

幸勝 彦三郎 土佐守

母藤田中務太輔女、』 属上杉、』

麻生太郎左衛門勝家書曰勝家ハ岩田、幸勝ノ嫡子也、土佐守幸勝養』兒有恣、飲食

常撰毒与能當醫家之節、故教子皆』健也、又平生扛重攀高、故

成長之後、盡多力剛強也、』且雖不要博学、每々說古人忠義之

行、使兒等記』憶之、故顯勇猛云、故所其教、所其育、義守

己、勇』過人、由是觀之、父慈子豈可不慎之乎、秩父郡四万』

部・横瀬・宮沢・野上・藤矢淵・金尾・岩田邑中、以永樂錢』

五百八八貫百緡、構菟裘、戒名善鑒真光居士、

女 小幡左衛門重純妻 上州国峯 小幡城主也、

重行 橡原木工之助

女 本庄藤太郎藤正妻

範平 童名猪野丸 猪俣和泉守

母猪俣彈正忠小野範宗女、

幸清 左衛門太郎 河内守、從六位下

母猪俣彈正忠小野範宗女、』數代属上杉家幕下有軍功、天文四

年河越夜軍之時、』幸清者、榛澤郡藤田城主藤田右衛門佐小野

国房因』為一家、同意藤田、降北条氏康、弟彦二郎吉次者、属

旧主上杉憲政趣上野国、此時、兄弟相隔雖、武州秩』父郡白鳥

庄岩田邑多年居住襲世、属上杉管領麾下、至上杉憲政之時、

幸清父幸勝忠節無二心、是以管』領籠光預別所邑久那地、属以

久那猪鼻七騎・大』瀧七騎、土佐守入道宗真當此時、世人土佐

守入道称』久那殿、幸勝為深山保守兄猪俣和泉守範幸居榛』沢

郡、三男岩田彦二郎吉次・四男市右衛門吉重・五男平藏』等

保守男衾城、宗真入道二男幸清住秩父郡久那、』武田信玄以野

心、為圖武州比企郡松山城主上杉憲』實、窺松山城、秩父郡武

信甲三四州進故捷徑、信玄』出秩父山松山潛行道緞久那邑時、過

騷雨、遣使幸』勝父子館、乞緞笠、此日館主他行、二男幸清在家、則』逢使、與簀笠百、信玄喜謁、謝幸清、上杉管領聞』此衷、大怒曰、卒然應雷羈族之士、且饗之、其意雖量、』以此没收猪鼻・大滝邑、又久那別所營穿陸、不窺』管領令為私、又設柵旁、有說者忽没收此也、』永祿五年正月、北条氏康・信玄以兩軍援松山城主、』上杉管領敗績、氏康大克、自是以往、幸勝北条家、』幸清在小田原城中、守竹浦口、北条氏滅亡之日、蟄』領邑相州一宮糟谷村、其後移武州鉢形領、天』正十八年十月十五日、卒於藤田、号樹竟院殿英山』道笈居士、墓有榛沢郡藤田郷本寄居村善導寺』後山、石碑之圖有別、

女 北条氏直臣山角主膳定常妻

邦清 千勝 改甚十郎

母新田常陸介高繁女、』

天正十年、邦清初陣、属鉢形、六月十九日、於上武』两州境神流河戰死、十九歳、異曰、廿二、号輕命義』忍居士、同日、伯父吉張又討死、瀧川陣是也、

清吉 彦九郎 改彦左衛門

母同右、

彦二郎

母猪俣彈正忠小野範宗女、』

兄忘上杉数世之旧交、属北条氏、為不道、与弟吉重』出奔岩田村、従上杉憲政、赴上野国、上杉零落後、天』正十年、織田信長使瀧川左近將監一益移居上州』厩橋、伏東国、因之、与西上

州国峯城主小幡上総介・』安中城主安中左近・武州倉賀野城主倉賀野淡』路守・東上州新田金山城主<sup>新</sup>由良信濃守・高山城主高山遠江守・西上州木部城主木部宮内少輔・武州』本庄城主本庄三河守以下相供、属瀧川一益、信長被』殺之時、一益退去東国故、諸城主皆附北条氏、唯吉』次先日以背北条氏康・藤田邦房、守義、未嘗従、忍』城主成田下総守氏吉、頻說而相勸、故吉次又属北』条氏、薙髮、号玄阿、北条陸奥守氏輝長臣中山助六郎』家勝入道全椿二男右京家清為嗣、後号岩田玄蕃頭、』異曰、玄阿卒于奥州<sup>云</sup>、

吉重 右衛門 号一右衛門

母安中主膳正女、

勇氣絶倫、少年之時、有故出奔岩田邑、属武田勝頼、居』甲州、成長而、甚猛兇人皆憚之、後与親族和親、武』田氏亡国之後、因為小幡重定之親族、天正十年、加』瀧川一益軍中、励血戰<sup>云</sup>、私曰、北条記・信長記謂、於神流川戰死者共非也、天正』十年之戰後、与谷崎忠右衛門同之奥州仕會津蒲』生氏郷、領一万石、於丸瓶之役、有軍功<sup>云</sup>、

吉張 平藏

母同吉重、』天正十年六月十九日、於上武两国境神流川』戰死、

直吉 虎 後七兵衛

天正十年、瀧川陣敗而、兄吉次同、北条氏政君降』麾下、直吉素多力、氏政知之、未試、一日請觀其量、』虎應命、曳鋸斷之、衆人恐伏、氏直嘆之曰、』我聞惡七兵衛景清能斷鋸、今於虎親看之耳、』須改名七兵衛、又賜諱字、天正十七年、在鉢形

城』中、於城門戰死、

幸利 內藏 傳左衛門

從北条氏、在鉢形城中、天正十八年六月、前田利長卒北国兵、

攻鉢形城、依城兵猪俣能登守直範異心、衆心不一、利長乘之、

使密僧竊說氏邦、且氏邦有縁利長、故遂和親退忒城、入昌龍

寺氏邦菩提所也、薙髮号宗青、之加州、因茲、幸利倍從加州、終仕』

利長、慶長頃、属前田家先鋒列、又於浅井暇在後殿云、

吉吉富丸

落魄奇食于清須德善寺脱、拜謁』

神君、後仕薩摩守忠吉主号性高院殿、御廟三録山、

傳曰、欲使後閑・岩田輩為仕祿、然トモ為軍離散諸国、不幸而

不應命故、嫡家幸清、天正十八年卒、幸次蟄奥州、吉重仕蒲生

氏郷、吉張天正十年』戰死、直吉天正十八在鉢形於城門戰死、

幸清利力之加州、末男吉奉拜

神君、後違命流浪、又仕薩摩守中将忠吉君、

女

家清

右京 改玄蕃頭 妻彦二郎吉次女、実土佐守幸勝女

家清之實父者、中山助六郎家勝入道全椿、家清二男也、家清

從房州氏邦、在鉢形城、天正十八年、氏邦退城之日、衝破北

国兵、直力真蟄秩父山中三峯山、有鉢形、家清守虎岡城鎮城也、

其後、文祿朝鮮之役、

神君出陣于名護屋、属北条美濃守氏盛、從此役、有名護屋、

東条紀伊守・白樫三郎兵衛二人共氏盛妹婿、岩田玄蕃頭等從北条

氏、有于此』幕府、凱歌之後、東条・白樫兩士之越前福井、祿

仕』彼家、家清性好酒、一日醉而落於馬上、損傷腕、依之、

蟄居武州榛沢郡藤田邑、家清無嗣子故、養同姓河内守子彦九

郎清吉、以若林新左衛門則貞女、妻之、使傳來家寶什器盡附

焉若林則貞家、清姪、是家、、一日從者十五人乘籃輿、來遊于武州府』中中邑、

判官物部稱称宜宅、此時上使板倉四郎左衛門、來于此、傳』

神君之命神君御書且賜黄金、所謂、使家清為祿仕也、家清辞曰、雖

君命忝、我腕既損傷之後、不堪採鎗、素餐野夫何為用不受所賜金、

于我、皆勇壯也、願足下以之可聞云、

傳曰、依家清落馬怪我腕損、甚非正說、猪荒依止、左腕

為猪被嚙、滝上村感藥師佛靈夢、浴相州温泉而、愈弓射

時、矢尺不任心、剃髮号義石、板倉氏對顏之翼年、於鉢

形加仁輪屋』敷卒勇進院猛譽樂醉居士、

玄蕃頭家清從者伊東采女傳云、

神君在府中、使板倉四郎右衛門問岩田河内守・新田常陸介於

家清、家清對曰、常陸介不知其所』終、河内守天正十八年卒、

神君賜黄金、辞之故、無復問、

清吉

彦九郎 改右京 後彦左衛門

實父岩田河内守幸清、實母福島伊三郎源頼勝女、

奉仕結城晴朝・秀康兩君、後浪人、清吉宅地、郡監伊奈備前

守巡察之日、聞清吉先人為岩田領主』賜宅地、寬永二年乙丑

五月十一日卒、四十二歲、火葬萱刈本』寄居村善導寺後山、築

墳立碑妙休院本是心居士、

政吉 童名宮房 傳九郎

母若林新左衛門則定女 号女郎、  
實者上田又太郎則秀入道安樂齊女、

政吉、慶長十四己酉年四月八日上剋、生于萱苺、晚年剃髮号宗貞、〔録〕二元録四辛未年正月五日寅上剋、八十三歳卒、即葬善導寺西山際、号蓮乘院岩譽宗貞居士、若林則貞、比企郡松山城主上田闇礫齊家臣也、則貞女ハ中山全椿孫而、勘解由次官家範姪女也、延宝四丙辰年十二月五日卒、九十九歳、墓善導寺後山、有〔〕恣号壽昌院松誉蓮慶大姉、政吉之妻女、秩父郡葎田村之農夫笠原与五兵衛〔若名与五郎女也、實者〕與五兵衛孫女小櫃氏女也、與五兵衛富農也、以己孫為養女、妻政吉、實父野州佐野邑井伊直孝末臣小櫃左次衛門光嚴女也、二女二男之母也、

女 初

女 鍋

清次 産名伊勢千代 新太郎 改玄蕃

寛永十九壬午年三月二十五日辰上剋、生萱苺庄、母者、農夫笠原與五郎女、号女郎、延寶六戊午年七月十日、於萱苺卒、七十四歳、即葬善導寺西山際、号智原院載譽貞蓮大姉、〔蓮力〕清次、元禄十一年戊寅三月廿七日卒、五十七歳、即葬善導寺西山際、号亮照院本譽宗慶居士、  
正持 小佐之助

母同、

季張 童名千石 彦太郎 覺之丞 喜内  
後主鈴

母者、小櫃右馬之助氏明女也、氏明、兵家者流柳生氏之祖、學繫劍於柳生但馬守、最爲高弟、又長鳥銃〔鳥〕之術、姓者源、實今川寂淵之次男也、有故、秘今川氏號而號小櫃季張、母〔恭〕女五十五歳、爲尼號淨善尼、爲黒瀧觀音〔瀧〕之門下、遂受拂子、享保三戊戌年六月二日申刻、藤田卿卒、年七十七歳、葬善導寺西山、有碑、號證眞院貞譽妙運尼、

季張者、延宝六戊午年七月二十一日辰上刻、生萱刈莊、〔童〕今川千石、今川氏、母春女、今川寂淵之曾孫也、故季張自懸弧至八歳、以五七之桐爲紋、名千石、以穩婆〔云〕、父清次、一子也、故專愛之冀成〔長力〕而已、敢就師不學書、及壯年不能讀書、季張一日以爲吾有實所由來何在阡陌之中與漁樵遊乎、是出出于江府、欲仕國朝、元禄十五壬午年三月、去萱刈野莊遊于東都、于時品川氏、先人看傳來之文書、請爲嗣、季張曰、人各有姓、有氏、不可混天之道也、假令雖以之得祿爵、繼任姓則滅自姓也、我所以去旧里、來遊于此、以我姓仕、

幕府冀耳也、不應其請、同年十一月、仕憲府先隊之騎士、屬横田甚右衛門由松、厥后、鳥居久太夫元茂・三浦監物貞次、歷仕〔德川家宣〕文廟・章廟、屬齋藤帶刀利久、至〔德川吉宗〕德廟、高木伊勢守守興、彦坂壹岐守重英、土屋刑部高直領之中、都合二百三十二石四斗五升一合三夕六才、享保八癸卯年

五月、致仕而、使二子喜内政郷襲秩、號主鈴（恥不、祖先不用通字、號孝張、）、號恒足軒、宝曆十二（自後、）年九月廿五日、八十八歳卒、號與治院殿誠、譽丹阿彌陀佛惠鑑居士、葬武州四谷浄土、宗大宗寺、

廣雄 童名猪助 甚十郎

元禄八乙亥年九月廿三日、於大里郡生、長、而後、中山勘解由直（マ、）一名一學直正曰、氏族無可疎之義矣、且以季張之命、我何以辭之、則名以一學、其性間雅好讀書誦詩詠和歌、又能遊于茶道、弄古器、雖小枝之藝、無不携、厭世路而終不仕、依為古卿、蟄于萱刈莊矣、于時宝曆十一辛巳九月廿五日卒、壽六十、七、號源洞院仙譽秋翁居士、葬善導寺、母者、阿部豊後守家臣竹井甚五右衛門紀、信親女（三、女、）、實者正親弟小尾新右衛門正信、女也、寛延三庚午年十二月十四日午刻卒、葬武州四谷浄土宗大宗寺、七十四歳、號香、修院殿戒譽精薰大姉、

政卿 丹宮 喜内

母同前、

元禄十一年戊寅八月十日子刻、於武州大里郡産、

女 木 後峯

元禄十五壬午年五月十九日亥刻、生大里郡、母同、小従人和田大七郎源重光妻、享保十六辛亥年九月廿八日、種光卒、葬青山、青原寺、即日薙髮、明和四年亥正月十日、六十、六歳卒、號貞岩院殿心操壽松法燈尼、武州葬、刈莊葬正龍寺、

女 春 岩

宝永元年甲申三月四日、生于武陵四谷、同母、黒田豊前守丹治比直重長臣田原要人、藤原忠興妻、享保七壬寅年八月廿八日卒、葬三縁山中心、光院、号恣壽院殿撰光理巖大姉、

女 律 政井

母同、宝永四丁亥年四月九日辰刻生、奉仕松平石見守源乘穩、

女 富 見勢 岩見

母同、宝永七庚寅年八月十三日子刻、生武州四谷、奉仕尾州黄門源宗勝卿・宗睦卿、

女 源

母同、寶曆十一年十月廿四日卒、葬小石川、浄土宗心光寺、号明鏡院冬譽清受大姉、

信盈 和田榮次郎、早世

女 鎮、大御番安藤小平治安部邦孝妻、

女 菊 連 陸 千尾

享保二十年乙卯九月九日酉刻、産於武州四谷、寛延元戊辰年八月十九日、奉仕、紀州亞相源宗直卿、寶曆三癸酉年、從三位、宰相宗武卿、後上原備後守二男上原大輔妻、母者、政卿妻、有故不記其父母、其為赤子之時、井上河内守侍従安部直岑夫婦寵愛之、膝下、享保十七壬子年春、其長臣某請河内守正之、以為政卿妻、

<p>某 源馬 丹宮</p>	<p>同母、『寛保元辛酉年九月十一日、生武州四谷、性聰』明、幼<small>(推方)</small>雅多能、以爲奇、宝曆元辛未年十二月十一日早世、葬武州四谷大宗寺、夢幻院淨譽清』雲曉月大童子、碑面有清雲之二字、則所書病』床以寫之、導師賞歎餘、以清雲加法名、</p>	<p>女直</p>	<p>同母、『元文三<small>(戊午乙)</small>戌年正月廿七日、生於武州四谷、『元文五庚申年二月廿九日早世、葬大宗寺、号』華光院影教童女、</p>	<p>女幸</p>	<p>同母、延享元甲子年八月十日、生於武州四谷、『延享二乙丑年十月十日早世、葬大宗寺、号』獎善院賤去童女、</p>	<p>女藏</p>	<p>同母、『延享四丁卯年十月十日、<small>(生脱乙)</small>於武州四谷、『宝曆三癸酉年二月廿四日早世、葬大宗寺、』號檀閣院幼誉知法童女、</p>	<p>簡卿<small>(郷)</small> 左内</p>	<p>實者秋元但馬守藤原涼朝長臣高山傳右衛門三男、『宝曆二壬申年十月、養而爲子、宝曆三癸酉年七月廿七日卒、葬大宗寺、号廉夫院黨譽簡卿居士、</p>	<p>政慰 知菊 仁三郎 同母、『寶曆二壬申年九月十一日、生武州四谷、</p>	<p>女 千加 歌 御徒與頭小野寺忠兵衛妻、 享保元申二月廿九日、於武州萱刈莊生、『延享初十月八日三<small>(四年)</small></p>
--------------------	--	-----------	---	-----------	---	-----------	--	------------------------------------	---	---	---

<p>十二歳卒、号等倫院徳』譽知妙大姉、葬淺草淨土宗源空寺、』母者、岩田新左衛門廣峯嫡女、元禄十四辛』巳十一月二日午上刻、於武州萱刈莊生、享』保六<small>辛</small>八月十一日辰上刻廿一歳卒、号亮智』院月光秋英大姉、葬萱刈野莊善導寺、</p>	<p>女市 小普請津田莊左衛門妻 小野寺源左衛門、『小笠原縫殿助組御徒、</p>	<p>女松 御勘定浦野新九郎妻 早世</p>	<p>廣敦<small>(稱乙)</small> □次郎 元八 久彌 彌次右衛門 享保三年戊二月廿九日、於武州萱刈野莊』生、出武江、神谷志摩守支配下勘定方務之、『依多病辭役、撰州矢田嶋郡花猥城主荒』木志摩守元清為幕下、薬師寺村田阿波守』藤原盛正續家、改村田、後養松野何某子、『令續村田家、依實子無之、末弟以岩田覺之丞、令』續本姓、</p>	<p>女<small>(規與カ)</small> □□ 楚衛 「安永二癸巳年十一月五日卒ス、戒名廓涼院』芳洲静齋居士、」 森田善右衛門妻 母者奉仕紀州亞相源宗直卿田中友軒』可英娘、宝曆六丙子十一月十八日四十九歳卒、号』貞樹院松月智光大姉、武州萱刈莊善導寺、</p>	<p>女德次郎 早世、 女安</p>
---	--	----------------------------	---	--	------------------------

<p>丁酒之丞 早世、  <small>(ママ)</small> 李之丞      母同、</p>	<p>嘉門      此□  <small>古野</small>      岩田記四郎妻      母同、</p>	<p>源之助      女 加勢      勝之助      某 内藏助</p>	<p>某 權之助      母同、『元文元辰年十一月朔日、於萱刈野莊生、』同二年巳二月廿二日卒、快運幻哲童子、』葬善導寺、</p>	<p>女 春      母同、『寛保二戊四月廿三日生、延享元十月五日卒、理覺<small>(女脱)</small>涼心童、葬同寺、  <small>規乃</small>      母同、『武州鉢形住雨宮嘉春妻、</p>
---	---	--	---	---

<p>丁太吉  <small>(追筆)</small> 廣勤 豹吾 覺之丞      母同、兄廣敦爲養子、      女 末      同母、兄廣敦爲養子、</p>	<p>女 兜<small>トウ</small>      寛延三年三月廿三日、於牛込生、寶曆三『癸酉正月廿一日卒、号淨空春調童女、芝三田』寺町葬真言宗長延寺、』母者、細川備後守家士飯田伴助品久女、』<small>(母方)</small>祖久祖者、豊後國大友爲幕下、天正十六『年十月十一日、嶋津・大友戦刻、飯田左京亮』統鎮日向國於耳川爲戦死孫流也、』品久者、寶曆十四年申五月朔日六十五歳』卒、号是法院道縁日義信士、葬谷中』日蓮宗一乘寺、』養母者、細川備後守家士春木太左衛門』秋塵嫡女春木氏女、福井云、從壯年』奉仕紀州亞相宗直卿、實子無姪養、』廣敦爲妻、』福井者、寶曆七年<small>丑</small>七月十日八十三歳』卒、純是院妙躰日悟大姉、葬芝 坂』下日蓮宗蓮乘寺、</p> <p>女 重      母同、『寛延四<small>末</small>九月廿八日、於牛込生、寶曆』三<small>西</small>三月朔日卒、芝三田寺町葬長延寺、</p> <p>廣勤 <small>豹吾 覺之丞</small>      實者廣雄三男、廣敦爲養子、實母者、田中氏女、』      明和二<small>西</small>五月廿三日御徒、</p> <p>章英 村田莊左衛門      女 末</p>
--	---

<p>男 猪之助</p>	<p>女 梅 国分家ニ嫁シ、仙藏ノ妻トナル、』国分仙藏ハ、明治五<sub>壬申</sub>年十二月二日卒ス、』法名可山直照道入居士、</p>	<p>男 耕太郎廣徳 天保十<sub>己亥</sub>年九月十四日、年廿七才ニシテ』卒ス、法名正義院常英日基信』土、</p>	<p>男 兼太郎 文化九<sub>甲申</sub>年四月廿六日卒ス、法名學習』童子、</p>	<p>女 某 文化三<sub>寅</sub>年四月五日卒ス、法名誓迎』童女、</p>	<p>男 平三郎 享和四<sub>甲子</sub>年正月二日卒ス、法名春曉』童子、</p>	<p>女 某 寛政九<sub>巳</sub>年十二月十二日卒ス、法名知忍』童女、</p>	<p>廣道 傳左衛門 齊藤家ヨリ入テ廣道<sub>勤</sub>ノ養子トナル、天明』八<sub>甲申</sub>年十一月十四日、御徒、安政三<sub>辰</sub>年』正月十六日卒ス、』實父ハ齊藤助太夫、寛政九<sub>巳</sub>年九月十四日去ル、法名有勇猛院唱行』日進信士號、母ハ文化十四<sub>丑</sub>九月廿』一日去ル、法名明鏡院妙浮日光信女、』妻(不詳)、</p>	<p>實者廣雄末女、</p>
--------------	--	--	--	--	---	--	---	----------------

<p>男 政之助 生母同、』別家、所在武藏国品川、』明治三十四年十月十二</p>	<p>男 某 生母同、早世、</p>	<p>男 正行 幼名安太郎 生母<sub>奈多</sub>法名光雲院乘譽妙』蓮大姉、』 下河脩平ノ養子トナル、所在武藏』国東京市本郷區根津、</p>	<p>男 惣左衛門 国分仙藏ノ弟、廣道ノ養子トナリ、岩』田ノ本姓ヲ継グ、』久保家ニ奉仕、御徒、禄元高百』五拾俵、添扶持七人扶持拝受』セリ、年齢六拾壹才ニテ去ル、有法名』瑞光院往譽詳雲居士號、卒』シタル年安政五<sub>午</sub>年正月六日、』妻奈多ハ、』矢内恒』三郎ヨリ入嫁、明』治十六年九月四日、年七拾三才ニテ去ル、』法名光雲院乘譽妙蓮大姉、</p>	<p>男 某 後岩田家ニ入テ、惣左衛門ノ養子ト』ナリ、岩田ノ本姓ヲ継グ、廣道ノ末子、文化十四<sub>丑</sub>年四月五日卒ス、』法名智幽童子、</p>	<p>女 佐木 生母同、</p>	<p>健吾 生母同、</p>	<p>生母梅、</p>
--	------------------------	--	--	--	----------------------	--------------------	-------------

男 某 生母同、早世、	日卒ス、法名常命院法海信士、
女 高 生母同、	
女 滝 生母同、『健吾ノ妻、	
女 貞 生母同、『藤田家ニ嫁ス、所在武藏国東京市』浅草區、	
女 筆 生母同、『須藤家ニ嫁ス、全家ノ一統總テ死』亡、	
男 久次郎 生母同、	
女 末 弘化三 <sup>丙午</sup> 年二月十一日卒ス、法名』教脱童子、葬本淨寺、	
男 松之助 生母同、『早世、	
女 松 生母同、『別家、所在武藏国東京市』芝區、松之助妻春、 明治十八年一月十五日、『年廿五才ニテ卒ス、法名智壽信女、	

健吾 国分仙藏ノ次男惣左衛門ノ養』子トナリ、岩田ノ本姓ヲ継グ、 養父』ヨリ引續キ、久保家ニ奉仕、御徒、『禄元高百五拾俵、 添扶持七』人扶持拜受セリ、維新ノ際、久』保家ノ東京ヨリ 静岡ニ至ラルベキトキ、『御先紋等ヲ勤ム、禄高ナシト雖ト モ、』此時放還金貳千兩拜受、生国』本国共ニ武藏、明治四 <sup>未</sup> 年八月』廿四日卒ス、法名有正徳院建』譽達源居士號、年三 拾七才、『妻ハ惣左衛 <sup>門脱カ</sup> ノ次女滝子、	
鎌太郎 生母滝、『健吾ノ第一子、明治五 <sup>甲</sup> 年十月』十日年九才ニテ卒ス、 法名文徳』院開譽正源居士、初メ静岡』ニ於テ岩田家ヲ相續セシモノ、	
女 偵 生母同、	
男 竹次郎 生母同、『慶應四 <sup>辰</sup> 年四月朔日卒ス、法名新』寂智専童子、 新造	
男 新造 生母同、末子、	
(後略) (II)	

【史料四 岩田氏多治比姓世系圖 (館林本)】 (12)  
(外題簽)  
 岩田家系譜同由緒書 完

岩田氏 多治比姓

本國武藏

世系圖 家紋角ノ内丸ニ或ハ丹字車ノ亦九一ヲ紋トス

本國者、武藏國秩父郡白鳥郷青木庄岩田邑也、岩田ハ邑名而、在『於武藏國秩父郡、土人曰、一大石在田邊、号岩田、以岩田爲稱號者、第二十二代』岩田七郎丹治政廣始領其所、在館舍跡、亦岩田山有墟、吉例年毎『元日』以一羹二麴饗應之、自祖至今用此例、丹黨氏神勲八等正一位丹姓大明神、是『第十代丹治比真人家義之神靈也、於岩田邑、每年九月十九日爲祭禮、其別當』謂滿光寺、亦同邑野上邑勸請丹生社、每年二月朔日祭祀、加美郡西安保邑、九月十九日、高麗郡中山加治郷判乃莊日影村勸請丹生社、每年九月十六日、秩父郡廣瀨邑勸請丹生社、每年祭月祭日上世祭日ハ、大瀧馬在之、同郡薄村藥師堂、地内有丹生社、每年三月十六日祭禮、榛澤郡塩屋・那賀郡古郡丹生社有リ、毎年二月十六日祭礼有之、惣丹黨有村ニハ必齋祭丹生社也ト云、『近代和ノ字ヲ以テ通字トス、三ツ引ヲ以テ家ノ合印トス、近代丹ノ字繫』ヲモ用ユ○丸ノ中丹一文字ヲ以テ家紋トス、又水月窓月ヲモ用ユ、亦近代角ノ内』丸一ヲ以テ定紋トシ、丹字車并丸一ヲ以テ替紋トス、凡丹姓以田爲紋者多、蓋出於丹篆字者乎、

○この間、家紋一〇種絵図あり、又合印三種絵図の付箋あり(13)

天皇第二十九代

宣化天皇 諱武小廣國押盾尊 檜隈高子皇子

繼體帝第二之皇子、安閑帝同母弟也、母謂妃日國子媛、是尾張連草香』之女也、雄略帝十二年戊申生、安閑帝二年乙卯十二月十二日即位、于時歲六十八異曰、安閑帝二年乙卯即位、群臣奏上號勳、二年春正月遷都大和國高市郡檜隈廬入野、夏五月』詔曰、食天下本也、黄金萬貫不可療飢、白玉千箱何能救命、收藏穀稼』蓄積儲糧邊設凶年厚饗良容

修造宮家那津ノ口、四年己未春二月』十八日崩甲午、在位四年、壽七十三、葬大和國桃花鳥坂上之陵、

上植葉皇子一名 檜隈王 又 惠波皇子

母橘仲皇后、亦名 椀子、是丹比公・偉那公凡二姓之先祖也、

火焰 皇子 種 稚田君 悉比陀君 母大河内稚子媛、

石姫 皇女 欽明帝為后 敏達帝母 母橘仲姫、

少石姫皇女 欽明帝納之、 母同上、

倉稚綾姫皇女 母同、

山下目影皇女 母同、

十市王

多治比古王

河内國丹南郡多治比村若松天神延喜式所載丹治比神社是也、毎年』六月二十五日修祭事、則丹治比古王之靈社也、今稱菅神、非也、

嶋 從一位 左大臣 多治比真人

天武帝十三年多治比真人ノ姓ヲ賜フ、大寶元年七月薨七十八歳、

池守 從二位 大納言 大宰師神

天平二年二月九日薨、

縣守 正三位 中納言 民部卿神

<p>靈龜二年為遣唐使、養老四年九月蝦夷反ス、依テ任征夷大將軍、是ヲ討平ク、是宣命之始也、天平九年六月十八日薨、壽七十歲、</p> <p>水守 從三位 中納言 刑部<small>卿</small>鄉</p> <p>薨去年月不詳、</p>	<p>廣足 從三位 中納言 兵部<small>卿</small>鄉</p> <p>寶字四年正月十一日薨、</p>	<p>廣成 從三位 中納言 式部<small>卿</small>鄉</p> <p>皇太子傳職 天平四年八月任鎮守府將軍、為遣唐使、姓改丹墀、』謁唐玄宗皇帝、同七年下道真備ト唐ヨリ還リ、孔子及七十哲像』唐禮大衍曆等ヲ獻ス、皈朝後姓復丹治比、同十一年正月十二日薨、</p>	<p>濱成 正五位 武藏守</p>	<p>貞成 從五位上 木工頭</p> <p>天長九年四月廿五日姓為丹治、</p>	<p>峯成 從四位上 左京大夫</p> <p>貞觀八年姓号丹墀、又為丹治、是丹黨之祖、</p>	<p>長成 從四位下 私市大夫</p> <p>武州私市邑ニ下向而是ヨリ代々号私市大夫、私黨祖、紋〇丸之内二字、丹ノ字』古文字、幕紋蔦ニ鳩、</p>
--	--	--	-------------------	--	---	---

<p>高成 邦高 致成 師成</p>	<p>幹成 自為私市氏 私黨</p> <p>私黨 熊谷 久下 私市 騎玉<small>西</small> 河原 瀨山 瓶尻</p> <p>肥塚 根岸 久戸 春野原 管甲 以上十三氏等祖也、</p>	<p>宗直 政直 茂直 直幹</p> <p>彦武王 守家王 長野王</p>	<p>家範<small>異憲</small> 正二位 右大臣 丹治真人</p> <p>繼體帝始賜姓、稱丹治真人、或曰、夫繼體者宣化二世之先而家範亦宣化之曾孫也、如時代不應厚、按蓋夫繼體八十三歲而山明矣以無主二年而后安閑即位』二年而宣化即位四年而后崩矣、此積九十年也、而宣化之壽七十二、故知繼體』十九歲而生宣化、若宣化十七歲而生植葉<small>第一子故</small>、植葉十九歲而生彦武<small>第二子故</small>、彦武十七歲而生家範<small>第一子故</small>、則積七十二也、然則、繼體崩之年、家範』既十三歲、當賜姓之歲也、豈何疑之有、</p>	<p>家隆 正三位 右大臣 征夷大將軍</p> <p>推古帝之時任之、</p>	<p>家廣 從二位 大納言 鎮狄大將軍</p> <p>皇極帝之時任之、</p>
--------------------	--	---------------------------------------	--	---	---

家綱	從二位 左近衛大將
頼景	正二位 帥大納言
家景	從三位 宰相 大藏卿 <sup>〔卿〕</sup>
家義	太郎 宮内卿 丹治比真人
家信	正五位下 主水正 嵯峨帝之時人、
武信	從五位下 武藏守
峯信	異延 栗名丹二太夫

桓武帝之時、賜大和國澁田庄而住其處矣、所謂祀號正一位丹姓大明神、則家義』之神靈也、傳曰、其靈引導僧空海於高野山、其跡似獵人、故謂之獵場明神、』其時率二犬、因又謂犬山師、按導空海之事、似丹生明神<sup>〔丹生明神之度出〕</sup>高野之傳記、今以實理』推之、其時家義在和笏近高野、因生前合力於空海故以感其志報其功、沒後』追崇之而為明神乎<sup>〔生既普通故、号丹姓〕</sup>、以擬丹生之神者乎

陽成帝元慶元年配流武州、遂開發秩父郡・加美郡・其他一井・加治等之處』而押領之、自是始零落于關東、後蒙勅免而皈洛、

峯時	異明 丹貫主 丹太夫 丹治太夫
峯房	從五位下 武藏守
武經	異綱 從五位下 伊豫守
武基	太夫判官
武時	從五位下 武藏守
武峯	異平 四郎冠者 二太夫
經房	丹三鬼者

栗名 薦野 立花 以上三氏之祖、』薦野氏系傳曰、宮内卿家義之孫丹治武延因陽成帝之勅下向武州、』領加治卿、是武州丹黨之隨一也、其子峯延下九州、住筑』前國糟屋卿薦』野庄、以城養德山、自是稱薦野氏也、按如此則峯延之後、武与筑兩家也、

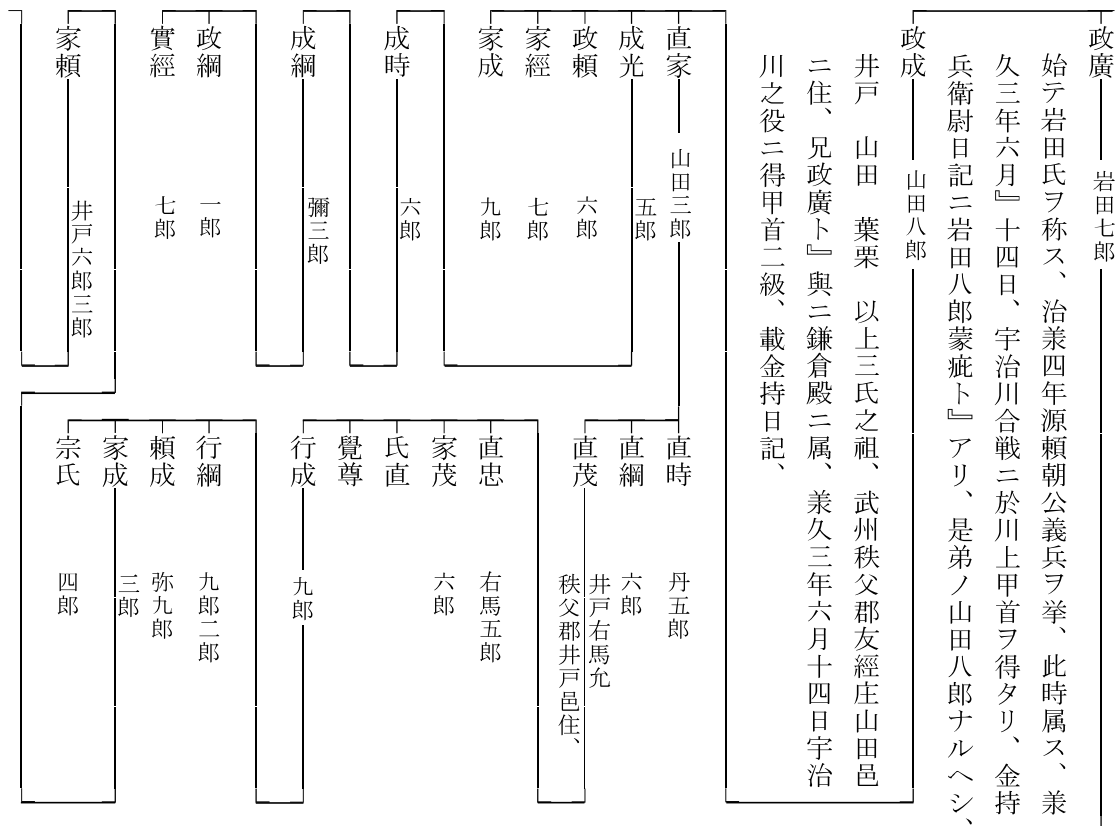
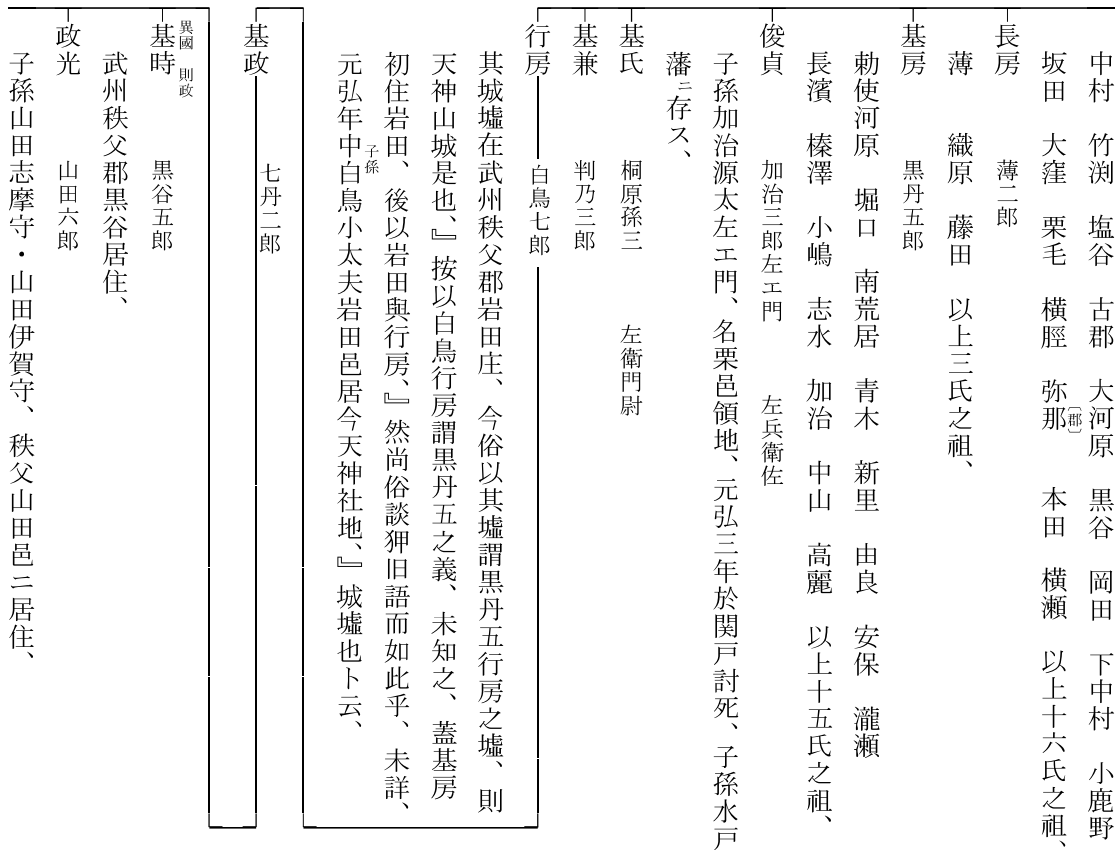
始住關東、按自是為武藏国住人、

是ヨリ季、<sup>〔末カ〕</sup>新寄居村岩田力家二雨漏朽タル中ヨリ綸旨北條家其外之御文書』無恙出タル中ヨリ、正真書說也、丹黨枝葉如左、

岩田恒足軒謹誌<sup>〔恒足軒高祖父〕</sup>岩田邑、<sup>〔天正十八年迄〕</sup>住スル也

始為秩父郡之管領、住武州秩父、

異曰、武平四男、故号四郎冠者、





【古文書一】<sup>(14)</sup>  
武藏國秩父郡妙見山之下星供有家、加美郡安保勅使河原跡、如故所令』還補也、守先例、致沙汰之狀、如件、

貞治二年九月十六日  
基氏判<sup>(足利)</sup>  
岩田太郎殿

實長<sup>異利</sup> 將監太郎 左衛門尉  
實春<sup>イ光</sup> 安保丹後守 初將監二郎  
實季 將監三郎 上野介  
實成 將監四郎 三河守

女 武州榛澤郡藤田城主』藤田長門守小野宗員妻  
實員 太郎三郎 式部少輔

永享年中頃ノ人、岩田ノ内枝郷吉田ニ住、館ノ跡今道光寺東ノ方ノ畑也、

忠重 九郎 丹太郎 帶刀先生  
文章生  
母 猪股太郎小野定平女、

忠幸 太郎 八郎五郎 尾張守

母 後閑左京太夫源宗久女、』

永正四丁卯年十月十六日卒、法号不知、

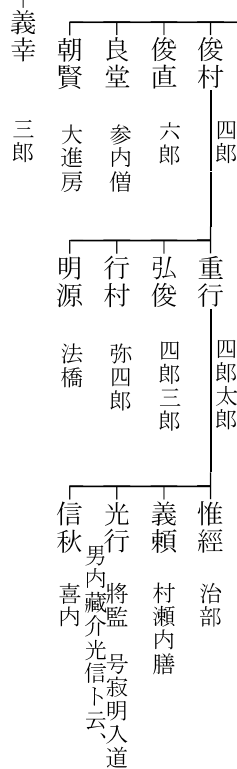
【古文書二】  
昨五日、諸勢小栗へ取懸候陣改時ニ外城攻落之由、今日早速注進候、』実城も幾程不可有之由、一黨之衆中之軍功各蒙疵之義、猶具』令注進候、恐惶謹言、

（享徳四年）  
四月六日  
成氏判<sup>(足利)</sup>

【古文書三】  
昨日於武刃岡部合戦、碎手被励軍功候、殊一族・被官或者死傷之』由、無比類戦功之段者、追而可被成御感祝候、仍而一兩日者、在本陣可』被致調義候、以使尋巨細可被 仰出候、恐惶謹言、

四月九日  
成氏判<sup>(足利)</sup>


岩田太郎殿  
二郎 兵衛二郎 將監



義幸 三郎 兵衛三郎 對馬守

實帶刀先生忠重三男、兄忠幸無子、弟ヲ以家督ス、世俗傳言、岩田ノ内分三』上郷・中郷・下郷ト云、對州君ノ所住下郷ト云、仍人穰堯田殿、祈禱所滿光寺ハ』堯田有之、号堯田山、位牌所道光寺ハ吉田ニ有之、号吉田山、菩提所瑞巖寺ハ』号岩田山、對馬守卒去年月不知、戒名臨田淨室居士、室ハ香蓮貞室大姉、』右夫婦位牌在岩田邑滿光寺<sup>新義派 眞言宗</sup>・道光寺<sup>妙心寺派 臨濟宗</sup>・瑞巖寺<sup>同上</sup>其外』岩田領地所々寺、

<p>義真 後閑孫太郎 <small>後閑長門守宗澄、後閑刑部少輔、天正ノ比岩田、後閑代々一家タリ、</small></p> <p>幸重 孫二郎 遠江守</p> <p>對馬守義幸二男、兄義真後閑家ヲ継ク、依テ家督ス、</p> <p>女 武州榛沢郡人見城主』人見越前守小野安利妻 <small>人見ハ管領上杉家臣、人見代々ノ任人也、中山道深谷驛邊也、曾孫人見某上杉左兵衛佐藤原吉惠家臣、今人見代々屋敷時宗、乘寺ト云、人見代々壘所在リ、人見備孫加賀中納言殿家土人見才三郎ト云、</small></p> <p>女 武州男衾郡本田城主』本田筑前守丹治貞信妻 <small>本田ハ頼朝公以來本田二居任、西本田、東本田アリ、東ハ品山忠家臣トナリ、西ハ嶋津忠久、家臣トナル、今幕府土大御番本田藤十郎西本田也</small></p> <p>女 武州秩父郡日尾城主』諏訪部三河守源光長妻 <small>諏訪部ハ信州源氏、元ハ諏訪ノ神孫諏訪氏也、故、椿巻三藏本字ナリ、敏力御字也』税ノ義俗也</small></p> <p>房幸 三郎六郎</p>	<p>房幸 三郎六郎 伊勢守</p> <p>實對馬守義幸三男、兄幸重無子、弟ヲ以家督ス、常ニ伊勢ノ内外ノ皇大神宮ヲ信シテ有無想、受領スルニ至テ勢州ノ太守ヲ稱ス、遂ニ勢州ノ奉行職タリ、</p>	<p>幸勝 彦三郎 土佐守 号 宗真入道</p> <p>關東管領上杉家ニ屬ス、麾下第一ノ精兵ト号ス、武藏国秩父・榛澤・加美・大里・高麗』諸郡ニテ食邑廿七箇所ヲ賜ル、子孫或ハ其邑ニ居、又ハ氏トスル者有リ、至憲政ノ時、幸勝』力武勇忠節無二心ヲ感シテ、別ニ封邑ヲ増与へ、且久那七騎・猪鼻七騎・大瀧七騎ヲ附屬セラル、世或ハ稱シテ久那殿ト申ケル、後薙髮、號宗真入道、長臣麻生太郎左エ門』勝永力家書曰、土</p>
--	---	--

<p>佐守養兒有法、飲食常撰毒与能當醫家之節、故教』子皆健也、又平生扛重攀高、故成長之後、盡多力剛強也、且雖不要博學』每々説古人忠義勇行、使兒等記憶之、故各顯勇猛ト云々、故所其教、所其』養、義守己、勇過人、由是觀之、父慈子孝、豈可不慎之乎、岩田邑内武劬』秩父郡四万部・横瀬・宮澤・野上・藤矢淵・金尾以永樂錢五百八貫八百緡、構』菟裘<small>俗名曰、</small>金尾墟山長臣麻生守之、麻生ハ宇都宮別藤原也、天文十五年』九月七日幸勝卒、壽九十七歳、戒名雲閑玄秀居士、』</p> <p>室 天文十二年十月朔日卒、法名円室妙頓大姉、』</p> <p>右菩提、武州秩父郡岩田邑吉田山堂光寺二有リ、</p> <p>女 上州甘樂郡小畑國峰城主』小幡左衛門尉重景妻 <small>今幕府土小幡平太、郎重純、先祖ナリ</small></p> <p>女 武州兒玉郡本庄城主』本庄三河守藤政妻 <small>今幕府土本庄藤太、郎先祖』ナリ、</small></p> <p>重行 橡原木工之助</p> <p>武州秩父郡藤矢淵村ニ橡原山ト云アリ、是ニ住ス、則岩田氏ノ別家也、此末上州沼田城主』真田伊賀守信利家臣ト成、同家断絶後、幕府ノ御扶持人ト成、吾妻大笹御閑所番』人被仰付、橡原十郎左エ門ト云、高二百俵、家紋 、</p>	<p>宗行 彦太郎 大和守</p> <p>母藤田中務大輔小野長頭女、』</p> <p>關東管領上杉憲政ニ屬、父幸勝トトモニ屢軍功ヲ顯ス、</p> <p>範平 猪股和泉守 童名 猪野丸</p> <p>母猪股彈正忠小野範宗女、外祖父為養子、猪股ニ實城・末家ト二家アリ、範宗ハ』末家也、代々猪股城主タリ、家紋憚之、則猪股丹波</p>
---	---

守・猪股能登守皆一家タリ、子孫』加賀中納言殿家中猪股齊宮祖也、  
岩田・猪股代々一家タリ、

幸清 彦八郎 左工門太郎 内藏介  
河内守 從六位下  
母同上、』

數代属上杉家幕下、有軍功、天文四年河越夜軍之時一説三日尻、合戰之時、幸清  
ハ榛澤郡』藤田城主藤田左工門佐小野邦房因為一家、同意藤田、  
降北條氏康、弟吉次ハ』属舊主上杉憲政、趣上野國、此時兄弟弟  
相隔離、武州秩父郡白鳥庄岩田邑多年』居住、襲世属上杉管領  
麾下、賜ル処ノ感狀及ヒ尺牘有リ、至憲政之時、父幸勝』忠節  
無二、是ヲ以管領寵光預別所邑久那地、属以久那七騎・猪鼻七騎  
・大瀧七騎、』土佐守入道宗真當此時、世人土佐守爾久那殿、  
宗真入道并嫡男宗行為深山』保守二男範平居榛澤郡、四男吉次  
等保守御男衾城、宗真入道三男幸清』住秩父郡久那、武田信玄  
以野心、為圖武州比企郡松山城主上杉憲實之、窺松山城、』秩  
父郡武信甲三ノ四州近故有捷徑、信玄出秩父山松山潛行道假久  
那邑時、』遇騒雨、依遣使幸勝父子館、乞假筥、此日館主他行、  
三男幸清在家、則逢』使、與簍筥百、信玄喜謁、謝幸清畢、上  
杉管領聞此事、大怒曰、卒然應』需羈旅之士、且饗之、其意難  
量、以此没収猪鼻・大滝邑、亦久那別所管穿陸、』不窺管領今  
為私、又設柵、旁有讒者、忽没収此地、永禄五年正月北條氏康』  
・武田信玄以兩軍拔松山城主、上杉管領敗績、氏康大克、自是  
以往、属北條家、天正』十八年、幸清在小田原城中、守竹浦口  
有功、七月十一日小田原落城、北條氏滅亡、此日蟄』領邑相刃  
一宮糟屋村、其後移武州男衾郡鉢形領、天正十八庚寅年十月十

五日、』卒去於藤田、法號 樹覺院殿清譽英山道岌大居士 墓  
在榛澤郡藤田』郷本寄居村善導寺浄土宗阿上人 開基後山、石碑之圖在別、』  
室 新田常陸介源高繁女、年月忌日不詳、』法名 剛林院松  
月智貞大姉、

一 昨夜、此方抱之皆江野伏共夜討致し候處、早速為御助  
力道迄』御出候条、致祝着候、為其申入候也、

三月十七日

岩田彦八郎殿

安保 三郎殿

於陣中度と申届候分、不被及參陣候之間、雖催促無益候、』  
為以後、一篇宣之候、不移時日、可被着陣候否、速被申  
越、可得』其意候、恐と謹言、

三月廿七日 顯定判(上杉)

岩田内藏介殿

昨日之働、天晴神妙候也、

四月十六日

岩田河内守殿

兼而申定候着到一騎卷人、無不足来正月十五日當地江』可  
被相着候、恐惶謹言、 (印影)

十二月廿八日

岩田河内守殿

急度注進申上候、今日者敵未明ニ當地へ取懸申、石田も不  
致候、』町場・和田嶋両口へ取寄申キ、町場ニ而致拂候、  
我と自身懸合申、』江川橋前より押返申、酒口ハ山角物主ニ



(16)



( )

御座候、大藤随分走廻候、』然を和田島者伊奈四郎・小山田  
兵衛・武田左馬介、此衆物主』兩度翌和田嶋致可拂由候キ、  
随分及防戦押返、今日者為焼』不申候、定而明日者惣手ヲ  
以可致由存候、見合指引可申付候、乍去御心』安可被思召  
候、随之、今午尾遠山新四郎かせ者敵江走入申候、』其後  
信玄(武田)衆本衆十八町へ鎗を取候而、段々ニ被帰候間、十八町  
江』鉄炮を重堅固申付候、只今申刻被引退候、惣手へ人数  
入申、先日も』申上候鉄炮不足ニ御坐候、はなし手ハ御坐  
候間、筒ばかり借可被下候、箱』十八町之模様、何共迷惑  
奉存候有様ニ申上候旨、可預御披露候、恐惶』謹言、

八月十日 助五郎(北条)氏規

岩田河内守殿(17)  
今三日、信玄(武田)豆州口へ可出張由、境目告来候、至実儀者、重  
而早打と』可遣候間、各可打立有支度、今一左右之可被備  
候、人衆無遅滞様』堅申付、今一注進可被備候、恐惶謹言、  
極月三日 氏政(北条)判

岩田河内守殿  
富永新三郎殿  
太田越前守殿  
去廿四日於足利表、敵三人討捕候、高名之至、神妙候、』  
弥可走廻候也、  
正月廿八日(天正八年) 氏政(北条)判(18)  
岩田河内守殿

今度西國衆就出張、早速参陣殊無二可走廻之由、肝要候、』  
本意付而者、於駿・甲兩國之間、知行可任望候、弥抽忠信』  
尤候、仍如件、

天正十八年 六月廿日 氏直(北条) (花押影) (19)  
岩田河内守殿

女 山角主膳正定常妻

邦清 千勝 改 甚五郎

母新田常陸介源高繁女、』

天正十年、邦清初陣、属鉢形勢、六月十九日、於上武兩州境神流  
川戦死、』十九歳、号輕命義恩居士、瀧川陣是也、

富永松壽軒跡相統知行高秩父郡薄庄・白鳥庄内合』五百貫文、  
當行候、猶奉公可為肝要者也、

元龜三年壬申 十二月十一日 氏邦(北条)判  
岩田千勝とのへ

清吉 彦九郎

母上同、同姓玄蕃頭家清為養子、

吉次 彦二郎 武藏守  
母同上、 父幸勝家督、』

武藏國岩田庄天神山城主タリ、祖先以来足利將軍家ニ奉仕、上  
杉管領之簾下ニ』属セラル、天文四年河越夜軍之時、兄幸清忘  
上相數世之舊交、属北條氏康、為』不道、第吉重と出奔岩田邑、

從管領上杉憲政、趣上野国、天文廿年七月、『管領憲政北條氏康  
 二平井城ヲ破ラル、越後ニ奔ル、上杉零落後、再武州ニ皈ル、』  
 天正十年三月廿二日、織田信長公執權瀧川一益北伊勢五郡  
長嶋城主ヲ上野・  
 信濃ニ封シ、関東』管領ト爲シ、関東法制十五條ヲ定ム、依テ  
 一益関東ノ事務ヲ司ル、一益下向移居上州』厩橋城、伏東國、  
 因之、西上州國嶺城主小幡上総介信真・鷹巢城主鷹巢三河守』  
 信尚・東上州新田金山城主由良信濃守國繁・館林城主長尾但馬  
 守顯長・白倉』城主白倉左エ門佐宗住・藤岡城主内藤大和守秋  
 宣・安中城主安中越前守忠政・』高山城主高山遠江守重光・大  
 戸城主大戸民部少輔直光・木部城主木戸宮内大輔』貞利・和田  
 城主和田右京太夫信業・那波城主那波對馬守宗元・下館城主水  
 谷』伊勢守勝隆・小泉城主富岡對馬守重朝・石倉城主長根山城  
 守・五閑城主』後閑刑部少輔、野州小俣城主渋川相模守義勝・  
 藤岡城主藤岡佐渡守、武州』倉賀野城主倉賀野淡路守秀景・忍  
 城主成田下総守氏長・深谷城主深谷』左兵衛督憲盛・松山城主  
 上田上野介憲定・本庄城主本庄三河守藤政以下と』相共ニ、属  
 瀧川一益、同年六月朔日、信長公於本能寺、爲明智日向守光秀  
 被弑之時、『一益吊戰ヲセントテ一万八千餘人ヲ引卒シテ、東國  
 ヲ退去、北條氏政下戰、此時武藏守領知』武州安保城ニ在主、  
 我部下士佐原近江守・朽原源五郎ヲ火殿邑ニ置、麻生太郎左エ  
 門〇ヲ金尾』ニ置、伊東采女正・斉藤民部ヲ大里郡肥塚ニ置テ、  
 一益力聲援ヲナス、一益上京ノ後、関東』諸城主皆附北條氏、  
 唯吉次先年以背北條氏康、守義、未嘗從、成田氏長頗説而』相  
 勸、故吉次亦属北條氏、同年九月中山勘解由家勝二男右京亮家

清ヲ爲嗣子、』後玄蕃頭ト云是也、吉次薙髮、號玄阿、吉次天  
 正十八年、在小田原城中、守小瀧口』有功、同年四月十九日、  
 我居城天神山陥ル、同七月十一日、小田原落城、北条氏滅亡、  
 因テ蟄』領邑相州用田村、後移武州男衾郡鉢形領、天正十八庚  
 寅年八月廿六日卒、同國榛沢郡』本寄居邑善導寺葬、法號勇德  
 院殿善譽真宗玄阿大居士、異日、玄阿卒奥』州ト云、不審、  
 今度西國衆就出張、別而可走廻由、肝要候、本意之上、於上  
 州・駿州』兩國之間、一所可遣候、弥可被粉骨候、仍而如件、  
 天正十八年庚寅  
 六月朔日  
 岩田武藏守殿  
 氏直北条（花押影）  
 於力 助七郎 右京亮 玄蕃頭

家清  
 實武州八土  
己城主北條陸奥守氏輝氏照  
重臣中山勘解由丹治比家勝入道全椿齊一男、』  
 母者武州松  
山城主上田又次郎正朝入道安德齊一族若林主膳正則勝女、』  
 生質聰明、達文武之道、容貌美麗也、常ニ相撲ヲ好、組合之達  
 者也、北條氏康ニ仕、』十八歳之時、依氏康之命、鉢形城主北  
 條安房守氏邦ニ附属ス、此時自小田原、二百騎』之士家清ノ加  
 与力、鉢形城中ニ巨石アリ、家清出仕毎ニ動揺シ過ル由、氏邦  
 聞之、』其多力ヲ愛シケル今鉢形道子曲輪  
家清在屋敷跡、大江匡房力軍術ヲ學テ其奥  
 秘ヲ極、元龜』年中、倉賀野某・都嶋某等人衆ヲ以、鉢形廳下  
 武州児玉郡八幡山』城代横地備前守ヲ襲フ、此節為援兵、家清  
 与力ノ士ヲ以、加置八幡山、』又倉賀野・都嶋両士勢大佛村ニ  
 討入時、家清出向而得勝利、敵二騎討取、』其後総州旧井合戦

ノ時、有軍功、又甲州北谷合戦ノ時、武田將甘利志摩守ヲ討取、天正十年六月廿二日神流川合戦ニ、瀧川ノ將笹岡下野守ヲ始其手へ数多討取、殊無類ノ高名頸八ツ、氏直感狀ヲ宛ヘラル、家清從房州氏邦、在鉢形城、天正十八庚寅(年脱カ)六月十五日、鉢形并虎岡落城、氏邦退城、此日衝破北國兵、直塾秩父山中三峯山、曾(山脱カ)在鉢形、守虎岡城(鎮城城也)有功、文祿朝鮮之役 神君出陣于名護屋、北條(氏規)美濃守氏盛(子規)從此役、東條紀伊守・南條山城守・西條豊後守・白樫三郎兵衛(氏盛)等ト共ニ、從氏盛在于此幕府、凱歌ノ後、東條・白樫(氏盛)共ニ越前福井、仕彼家、家清性好酒、一日醉而落於馬上、損傷腕、依之、塾武州榛沢郡藤田邑、家清無嗣子(稱)故ニ、伯父河内守幸清子彦九郎清吉ヲ養へ、以若林新左エ門則貞女、妻之、使傳來(則貞女)家寶什器盡附焉(乃家清)、一日從者十五人乘籃輿、來遊于武羽府中邑、判官物部(稱)称亘宅、此時上使板倉伊賀守勝重、來于此、傳 神君之命(御直書黄金)、所謂、使家清(稱御長柄ヲ賜)為祿仕也、家清辞曰、雖君命忝、我腕既損傷之後、不堪採鑰、素餐野夫何為用(不受所賜金、以國用不足)、明日將歸藤田、復命足下宜潤色、甥等中山助六郎照守(後勘解由)・中山左助信吉(後備前守)雖疎于我、皆勇壯也、願足下以是可聞(云)、三十六度勝軍、北條家ヨリ三十六筋感狀(云)賜之、家清長臣伊東采女正傳云、神君在府中、使板倉勝重家清御由緒殊戦功(云)深蒙嘆賞可加近臣之列処、無其儀神君不喜故、無復問、於武州岩田城、慶長(云)十三戊申年十月廿一日卒去、法号勇進院猛誉回翁清夢樂醉大居士、同國寄居驛(昌龍寺 御朱印)、二拾石 葬、  
【古文書一四】去月廿八日、倉賀野・都嶋衆取合之刻、味方及敗軍處、中山

助七郎』為加勢罷出、味方得勝利候旨、殊敵忒人討捕事、可勝計也、此旨』安房守注進候、弥可抽軍功者也、  
 五月十四日 氏直(北卷)(花押影) (20)  
 中山助七郎殿  
【古文書一五】此度、於総刃旧井之地、働神妙候也、  
 三月廿四日 氏直(北卷)判乎 (21)  
 中山右京亮殿  
【古文書一六】去十七日於甲刃北谷表、敵甘利志摩討取候、高名之至、感悦候、弥可走』廻者也、仍如件、  
 八月廿二日 氏直(北卷)判  
 中山右京亮殿  
【古文書一七】去十九日於神流川、被遂防戦、凶徒数多討捕事、誠無類之高名』頸八ツ、就中其方尽粉骨笹岡下野守討捕之旨、戦功之至、無双』感入候、弥忠勤可為肝要候、恐惶謹言、  
 天正十年 氏直(北卷)判  
 六月廿二日 氏直(北卷)判  
 中山右京亮殿  
【古文書一八】武州榛沢郡榛澤村・原宿村、横地備前跡八幡社前南方観音』石限中沢、谷川村圓通寺領時斎料村、石之所、養父武蔵守遺跡』無相違宛行者也、  
 天正十壬午年 氏直(北卷)判乎 (22)  
 九月九日 氏直(北卷)判乎 (22)  
 岩田右京亮殿  
【古文書一九】瀧上河端屋鋪并金尾、養父武蔵守屋敷跡遺候、仍而如件、

天正十壬午年

九月十九日

(北条)  
氏直判

岩田右京亮殿 (23)

〔古文書二〇〕  
我等領知之内、秩父郡岩田村・野上村御届候故、進之候、

永可為御知』行候、恐惶謹言、

天正十年

十二月二日

(北条)  
氏直判

岩田玄蕃頭殿

〔古文書二二〕  
武州秩父郡岩田郷岩田城并城付知行、養父武藏守遺跡無相』

違宛行者也、

天正十壬午年

十二月三日

(北条)  
氏直判乎

岩田玄蕃頭殿

〔古文書二三〕  
いよく昨夜其地へ參着と存候、三峯山中之否実説二而候へ、

早と』小田原へ注進可被申、油断有間敷候、仍態申入候、謹言、

正月廿一日

(北条)  
氏邦判

岩田玄蕃頭殿

〔古文書三三〕  
帰陣已來者無音之間、及一輪候、抑今度信甲出張之處、長と』

在陣苦勞之至候、仍權柑壹合遣候、恐惶謹言、

(天正一〇年)  
十一月廿一日 (24)

(北条)  
氏直判

岩田玄蕃頭殿

清吉 彦九郎 彦左工門 右京 内記 玄蕃頭  
實 河内守幸清二男

結城左工門督晴朝・同中納言秀康両君二奉仕、後浪人、清吉宅

地、郡監伊奈備前守』忠次巡察之日、清吉先人聞為岩田領主賜

舊地、寛永二年丑五月十一日四十二歳卒去、』萱刈本寄居邑善

導寺後山、築墳立碑、法號妙體院殿本覺是心大居士、』

室 壽松院松誉蓮慶大姉、

政吉 イ持 宮房 傳吉 傳九郎 與五兵衛 藤兵衛 式部  
号 宗貞

母 若林新左工門則貞女、』實 上田又太郎則秀入道安樂齋女、

慶長十四酉年四月八日 巳上、生于萱刈、始テ武州寄居驛へ住、

開同所、晩年剃髮号』宗貞、元禄四未正月五日 寅、八十三歳卒、

善導寺西山際、法号蓮乘院殿岩誉宗貞』大居士、 室 智原

院載譽貞運大姉、

女

女 岩田傳兵衛妻

清次 伊勢千代 新太郎 新左工門 玄蕃

寛永十九午年三月廿五日 辰 生、元禄十一寅三月廿七日卒、五十七歳、

善導寺西山際、法名』亮照院殿本誉宗慶大居士、

正特 (マ) 小佐之助 与三右工門

吉重 鶴房 甚八郎 市右工門 右衛門尉

母安中主膳正 女、』

勇氣絶倫、少年之時、有故出奔岩田邑、甲陽武曰、武田勝頼二属、

居甲州、成長而、甚猛兇』人皆憚之、後親族卜和親、武田氏亡國之

後、因為小幡尾張守重定親族、天正十壬午年六月』十九日、加瀧川

左近將監一益軍中、神流川二出陣、励血戦、瀧川関東引拂之後、谷



入昌龍寺氏稱、『薙髮染衣号宗青、之加州、因茲、幸利亦倍從于加州、氏邦子三郎氏定二仕、塾居』浪濤躰ニテ有ケルカ、氏定モ幼シテ早世シケル故、加賀大納言利家其忠義ヲ感シ、恩禄ヲ賜』從是、終二前田家二仕、慶長五年八月小松城攻ノ時、加州先鋒將太田但馬守雄宗力手ニ』属シ、松平久兵衛等トトモニ先ヲ爭進戰於淺井巖橋中一番鎗ヲ合、又後殿ノ功アリ、』感狀ヲ賜ル

吉富 角房 彌助 仁左工門

生質勇猛、大兵大力也、有故而落魄、寄食于尾州清須大塚德善寺一向浪窄中』属諸手、頭高名、後金森出雲守長近二属、有勇名、其後奉拜 東照宮而奉仕、』違命流浪、亦清須中將忠吉松平郷二仕、號性高院、年月忌日不知其子弥左工門浪人シ 諏訪若狭守頼朝介德ヲ諷、浪人ニ終ル、其子助右工門被召長子御旗本二列ス、其子清右工門大 勤、其子乃右工門也、今大御番岩田助之進退、江都二儀、甲府二二儀也、傳曰、御番本多因幡守組、其子弥右工門甲府』欲從後關、岩田』豊為仕禄、然為軍離散、諸回不幸而不應命故、吉重ハ仕清生家、吉重ハ神流川』鉢形二戰死、幸利ハ仕前田家、吉富ハ奉拜 東照宮違命流浪、討死、直吉ハ』

幸吉

女

可高 茂左工門

母宇佐美弥五左工門姉無休女無休ハ法名、其俗名不知、尾州清須二生、住藝州而后死矣、不知其仕之家、』遂無継矣、

可植 岩田三藏 後 宇佐美 六左工門 加右工門

母同上、』

天正十四丙戌年産于尾州清須、十六歳而出父之家、別二自欲立

其家、流浪所々、遂』到越前國、宰相忠直公家士宇佐美彌五左工門家是外男也、自是而日月其氏初無休、弥五』住清須後、弥、皆仕重長公、信長公卒後、為浪濤高』五』遂仕源相公、宇佐美六左工門ト名乗ル、

元和元卯年大坂合戦ノ時、叔父弥五左工門ト俱々』越前裨將落合美作守重長手ニ附属出陣、五月七日於京橋口敵二人ニ叔父ト』トモニ馳合、一人ヲ打取、叔父力前日ノ高名ニ手疵負タル故、敵ニ組伏セラレシヲ扱テ上成ル敵ヲ』切伏、首ハ弥五左工門捕ケル、美作守高名ノ早ヲ賞シ、手印ヲ賜、且越前土西澤藤右工門・』吉田宇右工門・牧宗左工門等同列而為證人、忠直公ノ入實檢是時ノ刀、今幕傳スル短也、反七分、高田秀、掃上無銘、長二尺二寸三分、行ノ極礼アリ、後美作守論戰功之事、而越前家ヲ立退美作守紀伊大納言頼宣公被召、其孫源合九左工門ト云、故ニ其手ニ属ル者、弥五左工門始、亦去其家、可植モトモニ立去、其後美作守肝煎ヲ以テ』播州姫路城主本多美濃守忠政三仕、禄二百石、其子甲斐守政朝ノ時二料量不足ヲ以』八十三士トトモニ立去、縁ニ因テ、臻阿州、蜂須賀

山城 正保三年 六月十三日 宇佐美加右衛門殿 甚右衛門 始 与十郎 母同上、尾州清須大塚居住、

波国徳嶋長善寺葬、法號 勇林休西居士、  
為堪忍分高百五拾石道置候、從當秋全可令所務者也、』村付  
・役付別紙有之、以上、

正保三年 山城 六月十三日 宇佐美加右衛門殿

甚右衛門 始 与十郎

可勝 母同上、尾州清須大塚居住、

(ママ) 可豊 大塚居住、与次右工門 某 与七 早世、  
 勝重 尾張大納言殿二仕、元禄中於尾州卒、六右工門 可房 六右工門 同家仕、正徳中卒、子孫尾州二在、

可次 (ママ) 宇佐美加右衛門 始 九郎太郎 仁兵衛

母 香河氏、

寛永元甲子年四月八日生於播劔姫路、於阿劔以父之祿受、三分而其二以其一與弟』和充、仕玄虎到養君、鎮辰代、執其家事、無私盡其心無二、於是乎、及其疾』病而、鎮辰使加禄五十石日遲哉、此加俸於今甚悔若死、則全與其祿於廣甫也、』不日而死、寛文十一辛亥年九月八日卒、四十八歳、阿劔徳寫長善寺葬、法號』義正院仁宅敬西居士、』  
 室 蝶 今枝氏 寶永五戊子年八月十六日卒、法名』  
 見性院邦室貞周大姉、  
 [古文書五] 宛行知行高百石、從當秋全可令所務者也、村付・役付別紙有之、』以上、

萬治元 采女

八月二日 □□ (花押影)

宇佐美加右衛門殿

知行方

阿州那賀郡内膳領方 立江村

一 高五拾石 右、為加増遣之畢、全可令所務者也、

寛文十一年 式部

八月十日 □□ (花押影)

和充 宇佐美左工門 始 幾之助

母同上、

寛永四丁卯年生播劔姫路、寛文十二壬子年五月十二日卒、四十六歳、葬阿劔徳嶋長善』寺、祿五十石、有一子、庄野氏ヲ嗣、喜四郎卜号、継他姓故不載、

女 阿州家士 井上久兵衛妻

母同上、

女 同 小松傳之丞妻

母加藤氏、是續絃也、

廣甫 始 和衷 岩田彦助 始 宇佐美 幼名 三太郎 母今枝氏 又 弥五郎

萬治元戊戌年六月廿五日生於阿波国徳嶋郷富田邑、寛文十一辛亥年九月八日、父可次』卒、此時十四歳而治襲父之祿百五拾石  
阿州那賀郡立江村五十石、淡州三原郡下司村六 百五拾石也、初可次、和充不分父之采地而唯以其主産、十六石餘、同国津名郡長島村三十三石餘、郡令 分之、可次之加禄ハ立江村也、到廣甫之世、分定如此 既而、延宝元癸丑年十六歳ノ時、』出其家 此時之太守ハ鎮民之甥也、初使鎮民家監於、是乎、根太守而辭其祿、因其家之上皆出也 外舅今枝氏二偶居、大凡十四五年、』天和三癸亥年、京都・大坂二居住、貞享四丁卯年、武州江戸二赴、芝田町住居、此時三十歳、』元禄二己巳年七月廿七日、奉仕秋元君 從四位下侍從、但馬守齋知公、此時三十二歳也、以下由緒書二載故畧之、

曩祖彦助廣甫撰スル処之世系、其傳闕系ヲ断モノ有、不肖早ク』補綴ノ志有リ、群書諸記録ニ散出スル處及ヒ同姓系譜、先代』ヨリ傳ル所ノ寸紙分楮、イヤシモ家系ニ関係スルモノヲ集テ、』漸ク其統ヲ大成ス、子孫亘ク世譜ノ不足ヲ補テ、彌以明證』アラン事ヲ云爾、  
 萬延元歳庚申冬至前一日、自執筆以書、於東都之假第

(岩田) 丹治和貴

註(註番号は前号からのついで)

- (9) 卷子装、一巻。個人蔵。旧稿(新井浩文・根ヶ山泰史「丹党岩田氏に関する新史料」『文書館紀要(埼玉県立文書館)』三二、二〇一九年)参照。なお、本史料には多くの訓点が付されているが、煩雑を避けるため原則として翻刻を省略した。
- (10) 表紙見返には家紋二種絵図あり。下掲右写真参照。
- (11) 【史料二】同様、明治時代以降の部分には掲載を見送った。
- (12) 堅帳、一冊。館林市立資料館蔵「岩田家文書」B12-11(3)「岩田家系譜同由緒書 完」(『館林市立資料館収蔵資料目録 第三集』(館林市教育委員会文化振興課、一九九七年)所収)の前半部分。詳細は後章に譲るが、本史料は館林藩士の岩田家に伝えられたものである。
- (13) 絵図は下掲左写真参照。
- (14) 本史料に引用された古文書二六通には便宜上【古文書一】のように通番を付した。このうち中世文書は一〜二三で、新出史料とみられるものは四の年欠三月一七日付某感状写、一三の天正一八年六月朔日付北条氏直判物写、一六の年欠八月二二日付北条氏直感状写、一七の天正一〇年六月二二日付北条氏直書状写、二〇の同年一二月二日付北条氏直書状写、二一の同年一二月三日付北条氏直カ判物写、の六通である。一は『新編埼玉県史 資料編5中世1』四四九、一九は『戦国中世2』(以下『埼』と略す)一一六四・『戦国遺文 後北条氏編』(以下『戦』と略す)二四一四として既出。中世文書について、福井県小浜市所在「岩田家文書」中の写本(旧稿【表三】No.)等との対応関係を示すと左表の通りである。



本文番号	旧稿3等 No.等	備考
古文書一	—	既出
古文書二	18	
古文書三	17	
古文書四	—	新出
古文書五	15	宛所不一致
古文書六	9	差出不一致
古文書七	6	
古文書八	10	宛所不一致
古文書九	1	
古文書〇	8	差出不一致
古文書一	5	差出不一致
古文書二	12	
古文書三	—	新出
古文書四	7	差出不一致
古文書五	19	
古文書六	—	新出
古文書七	—	新出
古文書八	4	年付不一致 差出不一致
古文書九	—	既出
古文書〇	—	新出
古文書一	—	新出
古文書二	11	
古文書三	旧稿註 (19)	日付不一致

(次号につづく)